Alphonse Mucha Museum News

堺 アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化館）

アルフォンス・ミュシャ
《ビザンティン：ミュシャの壁布プロジェクト》
1900年頃　リトグラフ、紙　堺市蔵

Contents

vol.6

展示報告（2016年4月 — 2017年2月）
作品紹介
作品修復報告
イベントレポート
ミュシャ館インフォメーション

ミュシャとコスチューム
2016年3月12日（土）－2016年6月12日（日）

パリで一躍有名になったアルフォンス・ミュシャ(1860－1939)はさまざまな女性像を数多く描きました。彼女たちは美しさと華やかさを兼ね備え、時には豪奢な衣服を身にまとい見る者の目を誘います。彼女たちの衣服に注目してみると、しなやかな線で構成された曲線とともに様々な「形」がみえてきます。演劇の舞台衣装、当時流行したファッション、そして祖国チェコをはじめとした東欧の衣服など、それらはミュシャのオリジナルも含めて実に様々です。本展覧会では、ミュシャが描いた“コスチューム”にスポットをあて、ベルエポック期に流行したドレス、東欧の伝統的な衣装などあわせて50点の作品を展示しました。

第１章では、ミュシャがサラ・ベルナールのために手掛けた演劇ポスター《椿姫》を中心にその関連資料とあわせてご紹介しました。稀代の女優サラ・ベルナールに見いだされたミュシャは、彼女との専属契約を結び複数の演劇ポスターを手掛けます。なかでも演劇「椿姫」はミュシャがベルナールから依頼され衣装をデザインしたことでも知られています。1848年に小説家アレクサンドル・デュマ・フィスによって発表された「椿姫」は、のちに幾度も再演されてきました。すでに半世紀前に発表されたこの物語は、通常は古典的な衣装とともに演じられてきましたが、ベルナールが現代の衣装を採用し、ミュシャがそのデザインを手掛けたのです。アーミン(オコジョの冬用の毛皮)をまとった純白のドレスが目をひくこのポスターはパリの雑踏を行きかう人々に強く印象付けられたことでしょう。19世紀に広く流行した、コルセットによるウエストを絞ったスタイルとは対照的なシルエットですが、ミュシャのしなやかな線描がこのドレスを美しく構成しています。

第2章では、19世紀末のモードを文脈にミュシャの作品に描かれた衣装との関連をご紹介しました。19世紀末にはそれまでドレスの後腰が大きく膨らんでいた「バッスル・スタイル」に代わり「ベル型」といわれるウエストから裾にゆったりと広がるシルエットが台頭しました。また、一つの特徴として袖山が大きく膨らんだいわゆる「ジゴ袖」が流行します。例えばミュシャの作品《愛人たち》にみられる女性のイヴニング・ドレスはまさにこのスタイルが反映されているとみられます。同時代のモードが反映されている作品が少ない中で如実に表されている希少な例といえるでしょう。

ミュシャのまなざしは次第にパリから自身が生まれ育った祖国チェコに向けられてゆきます。パリで人気のデザイナーとなったミュシャですが、1910年に活動の拠点をチェコに移した後は、手掛ける仕事も祖国チェコに関係するものへと移行してゆきます。パリ時代に描かれた華やかで魅惑的な女性像は、その多くは東欧の伝統的な衣服をまとった少女へと変換されてゆきました。最後は20世紀初頭のモラヴィア地方やセルビア地方の実際の衣装とともに『装飾人物集』に落とし込んだスケッチをご覧いただきました。(N.N)

ミュシャのアトリエ―どんな作品を作っているの?―
2016年6月18日（土）－2016年10月16日（日）

ミュシャはその生涯のなかで多種多様な作品を制作しました。それらの作品には、版画技法の一つであるリトグラフで制作されたポスターや油彩による絵画、鉛筆での素描など、多岐にわたる技法が使われています。本展覧会では、そんなさまざま技法で制作された作品70点を、ミュシャのアトリエを覗き見る形式でご紹介しました。

第1章では、「リトグラフ」という版画技法で制作された作品を中心に展示すると同時に、「リトグラフ」制作工程のパネルやビデオでその印刷の仕組みをご紹介しました。「リトグラフ」という印刷方法は1798年にドイツ出身のアロイス・ゼネフェルダーによって発明された、版に科学的な処理を施すことで図柄を写し取る印刷方法です。比較的安価に大量の印刷が可能なこの方法は、商業印刷やジャーナリズムなどの発展に貢献してゆくこととなります。商業印刷の発展とミュシャの成功は非常に関係が深く、「リトグラフ」という技法について知ることもまた、ミュシャの作品への理解を深める近道となるでしょう。

第2章では、ミュシャが描いた油彩の作品を中心にご覧いただきました。前章でご紹介したようにポスターが有名なミュシャですが、もともとは歴史画家として大成する夢を抱いていました。そんなミュシャにとって油彩画を描くことは初心に帰る行為でもあったのかもしれません。アカデミックで写実的な画風で描かれたミュシャの油彩画は、ポスターを見慣れているとまったくの別人

が描いたようにも見えるでしょう。油彩画は大型のものも多く、後の故郷での制作への礎となるような作品も見受けられます。

第3章では、ミュシャが手がけた作品の中でも、主に絵画以外の作品とそれらに関係する素描を集めて展示いたしました。彫刻や室内装飾、アクセサリー、紙幣のデザインまで幅広い活動を行ったミュシャの仕事ぶりが見て取れます。また、有名になる前に請け負っていた書籍の挿絵の仕事についてもご紹介しました。

第4章では、ミュシャと同時代に活躍した芸術家たちの作品もご紹介しました。アール・ヌーヴォーの旗手の一人であるウジェーヌ・グラッセやその弟子ポール・ベルトン、猫を描いたポスターが印象的なテオフィール・アレクサンドル・スタンランなどが描いた、当時パリの街を彩ったポスターを並べてみると、ミュシャの作品との共通点や相違点を楽しむことができます。また、この時代にはアンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレックやピエール・ボナールなど、ポスターを新しい表現方法の一つとして選択する芸術家たちも出現します。ポスターは広告宣伝の媒体としてだけでなく、鑑賞の対象となる芸術作品としてもその価値を認められるようになってゆきました。ミュシャのアトリエで生まれた作品は、どの方法で制作された作品も芸術として愛され、現在まで人々を楽しませているのです。(M.I.)

ミュシャと新製品の誘い
2016年10月22日(土)－2017年2月5日(日)

大都市の近代化へと発展を遂げつつあったパリ。産業革命による技術の革新は社会に様々な変化をもたらしました。ポスターもそのひとつ。鮮やかな色彩を用いたリトグラフの発明はたちまちの内に商業印刷の主流となります。パリの街角をかざる華やかなポスターと画中を彩る新製品の数々。本展覧会は「新製品」に注目し、ミュシャをはじめ、ポスターの父ジュール・シェレなど19世紀末に活躍した画家たちのポスターや日本の明治・大正期にかけて制作された「引札」をあわせた約70点をご紹介しました。

18世紀からイギリスではじまる産業革命は、生産技術の革新やさらにはエネルギーの変革を社会にもたらしました。工業の機械化は大量生産が可能となった機械設備をそなえた大工場の誕生をもたらし、やがて資本主義体制が確立します。こうした動きのけん引役となったのが万国博覧会でした。万博では最先端の工業技術を公開し、主に国力を諸外国に誇示するといった目的があった一方で、大量の新製品を陳列し人々の購買意欲を刺激させる製品の宣伝の場としての機能もありました。導入では、人々の潜在的な欲望を喚起させる場であった博覧会をとおしてポスターが伝えるメッセージを探りました。

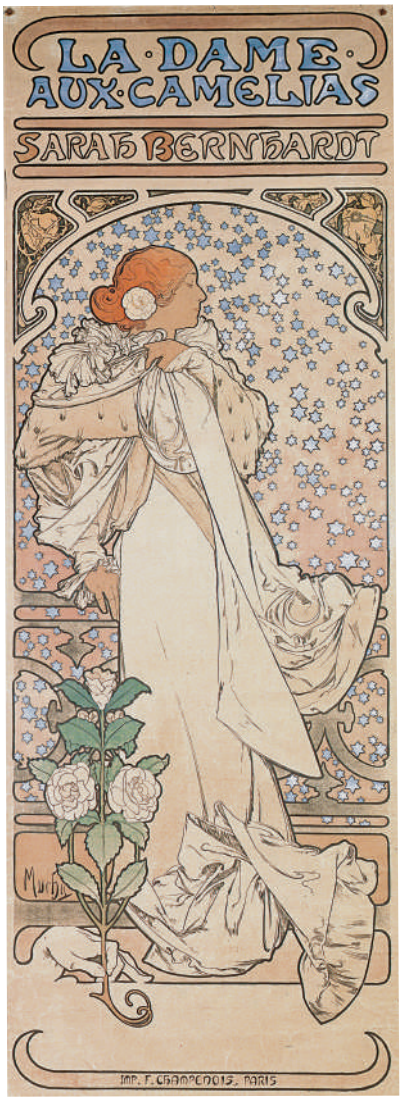
第1章そして第2章では、新製品とそれを支えた消費者を軸に美しく彩られたポスターを、またポスターが徐々に美術品としての価値を高め人々に受容されていった過程をご紹介しました。産業革命による機械化の進歩は同時に大規模な工場が登場し、雇用の増加を促します。次第に勤労者の生活水準も向上してゆきました。人々はものを消費する「消費者」となって欲望を掻き立てていきます。こうした動きをけん引したのが万国博覧会でしたが、19世紀に誕生したデパートは博覧会会場に建物・構造共に類似させたスペクタクルの場を日常空間に出現させ人々の消費をいっそう刺激させました。デパートの「魅せる」陳列は、あらゆる分野の商品が一堂に並び、自由に手に取ってみることができるという消費形態へと一変します。客はみているうちに欲しくなり衝動買いをする、といった潜在的な所有欲を刺激されていったのでした。ポスターが担う役割も単に商品の内容を告げる情報伝達の手段の枠を超え、街中を行きかう人々の注目を集め、購買意欲を掻き立て誘導する働きがあったのです。一方、街中を彩ったポスターは次第に「ポスター芸術」へと昇華されてゆきます。鑑賞の対象として、特にフランスでは大いに流行し版画作品を扱っていた画商はポスターも蒐集するようになりました。印刷技術の向上により、世の中には新聞や雑誌、書籍などが多く出版されるようになりますが、ミュシャもまた活動の幅を広げ、雑誌の挿絵を描くほか『ラ・プリュム』にはミュシャ特集号がくまれたほどでした。

第3章では、日本の広告チラシに注目しました。特にフランスでポスターが流行した時代、日本の明治・大正期にかけて流行したのが紙面の大部分が図像で占められていたいわゆる「正月用引札」でした。おめでたい図像に極彩色で彩られた正月用引札は、年末年始に商店主たちが近隣の顧客に充てて一軒ずつ訪問し挨拶とともに配布していたようです。堺市出身の女流作家 与謝野晶子の生家「駿河屋」が配布した正月用引札などもあわせてご紹介しました。(N.N)

堺市はミュシャと周辺画家の作品約500点を所蔵しています。企画展で展示された作品や人気作品などをピックアップしてご紹介します。

《椿姫》

1896年 リトグラフ、紙
2081×763mm



ミュシャが《ジスモンダ》に続き、女優サラ・ベルナールのために制作した演劇ポスター《椿姫》。このポスターは、ルネサンス劇場が1896年9月30日から始まる秋のシーズンの幕開けにベルナールを主演に迎えた「椿姫」を上演したときのものである。

フランスの小説家アレクサンドル・デュマ・フィスにより1848年に発表され、純朴な青年アルマンによって真実の愛に目覚めた高級娼婦マルグリットの悲劇的な生涯を描いたこの物語は、その後戯曲化されベルナールの当たり役のひとつとなり後に様々な土地、劇場で幾度となく上演された。女優のお気に入りのひとつであったこのポスターは、のちのアメリカンツアーの際にも色彩に変更を加えて印刷されている。

販売用に刷られ、また絵葉書としても転用されたことから、ミュシャのポスターが当時非常に人気であったことがうかがえる。(N.N)

《『イリュストラシオン』誌表紙(クリスマス号)》

1896年 リトグラフ、紙(雑誌) 425×200mm

19世紀は印刷技術の進歩によりカラー印刷や挿絵を複製し印刷するための新しい技術が開発されるようになる。それに従って印刷物はより速く、より安価に制作できるようになった。新聞や雑誌間での競争が激しくなると、各社は部数を伸ばすため連載小説や挿絵などで人々の心をつかんでいったのだった。

『イリュストラシオン』は1843年から1944年のおよそ102年間にわたって世界中に配布された週刊新聞で、発刊された当時において豊富な挿絵が特徴的な新聞であった。販売価格は年間購読料で30フラン。決して安くないこの金額からは知識人や支配階級などのブルジョアが読者層であったことがわかる。ミュシャはこの号で表紙だけでなく、挿絵も手掛けている。(N.N)

《ビザンティン: ミュシャの壁布プロジェクト》

1900年頃 リトグラフ、紙 262×365mm

長い茎を持つ植物に囲まれた女性が頬杖をついてこちらを見つめている。花や植物などの有機的な曲線や豪華なアクセサリーを身にまとった美しい女性など、ミュシャが多くの作品で用いてきたモチーフがふんだんに盛り込まれている。パリでさまざまなポスターや商品のパッケージデザインなどを手がけてきたミュシャだが、この作品はプリント生地用に注文されたデザイン。本作品の他にもいくつかプリント生地用のデザインが存在し、後にイギリスの製造業者によって布に印刷された。堺市は実際にデザインがベルベットに印刷された《ビザンティン：壁布》という作品を所蔵している。(M.I.)

作品修復報告

2016年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
《トスカ》	1899年	リトグラフ、紙	1040×371	裏打ちの除去、全体水洗、裂けの繕い、再裏打ちと作品固定、ブックマット・裏板新調	山領絵画修復工房
《カーネーション:四つの花》《ユリ:四つの花》《バラ:四つの花》《アイリス:四つの花》	1897年	リトグラフ、紙	1057×442、1057×445、1060×449、1057×450	裏打ちの除去、全体水洗、欠損部に補紙、補彩、ブックマット・裏板新調	山領絵画修復工房
第6回ソコル祭 他20点	—	—	—	作品保存に適した額装への改善(中性紙ハニカムボードへの作品の張込み、グレージングの交換、ドロアシの装着、裏板の交換 など)	ConRes工房

※作品寸法の単位はmm。

展示解説ツアー “神戸ファッション美術館×堺 アルフォンス・ミュシャ館”

2016年4月30日(土) 11:00~、14:00~(各回1時間程度)

企画展「ミュシャとコスチューム」開催にあたり作品をお借りした神戸ファッション美術館から学芸員の方をお招きし、ミュシャ館学芸員とのトーク形式による解説ツアーを行いました。「衣装」をテーマに19世紀末流行のスタイルや民族衣装に関する知識などを幅広く解説していただき、聞きごたえたっぷりの解説ツアーとなりました。(M.I.)

講演会 “アルフォンス・ミュシャの生きた東欧世界―宗教と民族を中心として―”

2016年5月14日(土) 14:00~15:30

国立民族学博物館 准教授の新免光比呂先生をお呼びし、スラヴ・東欧諸国の歴史や文化について、宗教と民族を中心にお話しいただく講演会を開催しました。ミュシャは晩年、スラヴ民族を主題とした作品を中心に制作しましたが、作品を理解するために必要なスラヴ・東欧諸国に関する知識は複雑で難しい部分も多くあります。新免先生のお話しはそんな難しい部分をわかりやすくコンパクトにまとめたもので、ご参加いただいた方々もそのお話しに没頭していた様子でした。(M.I.)

ワークショップ “おやこで体験!キッチンリトグラフ/やってみよう!キッチンリトグラフ”

2016年7月31日(日)/8月23日(火) 各日14:00~

ミュシャのポスターの多くが「リトグラフ」という版画技法で制作されています。現代の私たちにはあまりなじみのないこの「リトグラフ」という技法を簡単に体験できる「キッチンリトグラフ」という方法で、ミュシャの作品に対する理解を深めていただくこのイベントは一昨年に続く2回目の開催です。夏休みということで多くの親子連れの方々にご参加いただきました。最初は上手く版を作れない方も多かったのですが、参加者同士協力して上達し、最終的にはたくさんの力作が生まれました。(M.I.)

ワークショップ “作ってたのしい! 消しゴムはんこ”

2016年7月24日(日)/8月14日(日)/8月28日(日)/9月11日(日) 各日13:00~17:15

版画の種類の一つである「凸版」を体験していただくため、消しゴムはんこを作成するワークショップを4回実施しました。夏休み期間中ということで、親子連れの方々をはじめ非常にたくさんの方にご参加いただきました。専用の消しゴムにつまようじで絵柄を彫ったり、彫刻刀で削ったりしながら作成した消しゴムはんこにはそれぞれの個性が光って見えました。(M.I.)

ワークショップ “できるかな?ピンホールカメラに挑戦”

2016年11月26日(土)/2017年1月14日(土) 各日10:00~13:00

「ピンホールカメラ」を手作りし、野外での撮影と暗室での現像・焼き付けまでを実施しました。「ピンホールカメラ」とは、レンズを使わず針穴で像を写し出す簡単な構造のカメラで、どこかノスタルジックな味のある写真が撮影できます。2日間の開催日は両日とも天気に恵まれ、自作のカメラを手に屋外での撮影に挑むことができました。その後の暗室での現像・焼き付け作業では、撮影した像が浮かび上がった瞬間に感嘆の声が漏れるなど、新鮮な驚きに満ちたワークショップとなりました。(M.I.)

ワークショップ “紅茶と親しむアフタヌーン”

2016年12月24日(土) 14:00~16:00

日本紅茶協会認定シニアティーインストラクターの澤中紀子先生をお招きし、紅茶のおいしい入れ方や紅茶に関する知識などをレクチャーしていただきました。まずはサンスクエア堺での紅茶の入れ方の実習、クリスマスにぴったりのオレンジスパイスティーに挑戦しました。グループにわかれて普段とは違うひと手間をかけた紅茶の香りに包まれながら、イブのひとときをお楽しみいただけたようです。その後はミュシャ館3階展示室にて紅茶に関する講義が開かれ、紅茶についての理解が深まった一日となりました。(M.I.)

講演会 “ベル・エポックのパリとミュシャ”

2017年1月8日(日) 14:00~15:30

ミュシャが活躍した19世紀末から20世紀初頭のパリに息づいていた風俗や文化についてお話しいただく講演会を開催しました。講師は関西学院大学 文学部 教授の久保昭博先生にお願いし、当時の時代背景や流行などからミュシャの作品や活動を考える機会となりました。普段とは違う視点から見たミュシャにはっとすることも多く、講演会後の質疑応答では次々と質問の声があがるなど、新鮮な発見のある実り多い場となったのではないでしょうか。(M.I.)

リニューアルオープン

堺アルフォンス・ミュシャ館は2017年2月6日～6月30日まで空調等の設備改修工事のため休館いたします。ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

7月1日のリニューアルオープンより、企画展「あこがれ アルフォンス・ミュシャに魅せられた人々」とともに各種イベントも開催予定です。多くの方のご来館をお待ちしております。(M.I.)

粗品リニューアル

館内アンケートにてミュシャ館の広報物送付をご希望いただいた方に、次回ご来館時にお使いいただける「粗品交換券」付のハガキまたはご案内状をお送りしております。粗品として2012年度よりお渡ししておりましたしおりの絵柄を、2016年度よりリニューアルいたしました。全6種類、どの絵柄が当たるかはお楽しみです。ミュシャが挿絵を描いた書籍を中心に絵柄を選定した今回のしおり、どの作品が使われているのか探してみてくださいね！(M.I.)

鑑賞教育

2015年度から堺市が実施している美術鑑賞プログラム「わくわくびじゅつかん」。
2016年度は、原山台小学校、三国丘小学校、株式会社CLCに所属する子どもたちとミュシャの作品を鑑賞しました。いくつかのグループに分かれ、それぞれ作品の感想や自分が発見したことを話し合う子どもたちの目は、キラキラと輝いていました。(M.I.)

長崎県美術館 ミュシャ展 アール・ヌーヴォーの華
大分市美術館 大分合同新聞創刊130周年記念事業 ミュシャ展
飛騨高山美術館 飛騨高山美術館開館20周年記念特別展 華ひらく未来へ向かって ミュシャ展

2016年、堺市は3つの展覧会に作品を出品致しました。
まず4月2日～5月29日に長崎県美術館で開催された「ミュシャ展　アール・ヌーヴォーの華」には《ハーモニー》など8点を出品。続いて10月8日～12月4日に開催された、大分合同新聞創刊130周年記念事業「ミュシャ展」に《四つの宝石》シリーズ4点を出品し、九州地方でのミュシャ展を彩りました。

そして12月23日～2017年1月19日に開催された飛騨高山美術館の開館20周年記念特別展「華ひらく未来へ向かって　ミュシャ展」には《フォックス＝ランド・ジャマイカ・ラム》など57点を出品、関西圏以外の方々にも、堺市が所蔵するミュシャ作品の魅力を知っていただける機会となったのではないでしょうか。(M.I.)

国立新美術館「ミュシャ展」

国立新美術館開館10周年・チェコ文化年事業「ミュシャ展」が2017年3月8日(水)～6月5日(月)、国立新美術館 企画展示室２Ｅにて開催されています。ミュシャ館からも39点の作品を出品しております。(M.I.)

堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円

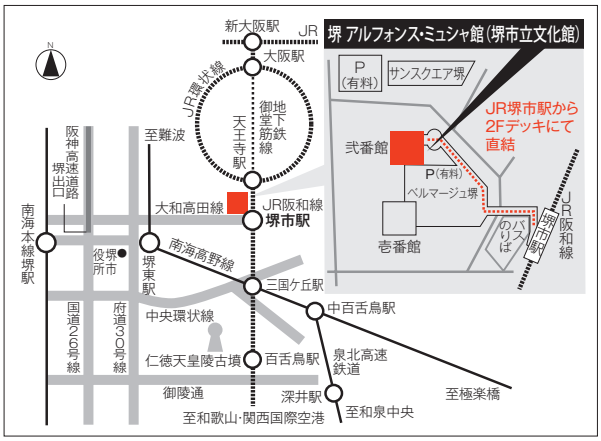
*小学生未満・65歳以上・障がい者手帳をお持ちの方と介助者は無料
*20人以上100人未満の団体は2割引

公式Facebookページ 好評更新中!

開館時間　9時30分—17時15分(入館は16時30分まで)

休館日　月曜日(休日の場合は開館)、休日の翌日(翌日が土・日・休日の場合は開館)
年末年始、展示替期間、2017年2月6日～6月30日(館の設備改修工事)

交通　JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分
JR快速にて・大阪から約27分・天王寺から約8分・和歌山から約62分・関西国際空港から約41分



590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL:072-222-5533　FAX:072-222-6833
http://mucha.sakai-bunshin.com

発行日＝2017年3月31日　発行＝堺 アルフォンス・ミュシャ館(堺市立文化館)　執筆＝井土真菜(M.I.)、西川奈津美(N.N.)　印刷＝株式会社 松岡印刷所